第21回バイオインフォマティクスセミナー

生命科学研究者の

夢を叶える手段としてのスタートアップ

講師　**中原拓** (ベンチャーキャピタリスト)

日時　令和元年5月10日13:00-15:00

会場　北海道大学工学部　B11教室

後援　日本バイオインフォマティクス学会
北海道地域部会

登録不要　聴講無料　ご自由にご参加下さい。

要旨

特殊環状ペプチドによる中分子創薬のペプチドリーム、切らないゲノム編集技術を活用した遺伝子発現コントロールのEdiGene、自由エネルギー摂動法を活用した分子動力学シミュレーションのModulusなど大学で行われている最先端のライフサイエンス研究を活用して成功するスタートアップが増えてきています。

経済産業省の2017年度大学発ベンチャー調査(2017)によれば、東大で約245社 (昨年比+29)、京大で140社(+41)と急激に増加しており、大学院生・教員のキャリアパスとしても存在感を増してきています。

世界的に見れば、エッジの効いた科学技術を持った大学のスタッフや学生が起業し、多くの人が使えるものとして実現し、IPOや大企業によるM&Aなどのexitに至っている例は珍しいことではありません。特にMITやスタンフォードといったトップ大学でこの傾向は顕著です。

米国においても日本においても、優秀な研究者・学生がスタートアップを通して自分の研究で世の中にインパクトを与えることを当然と考える時代が既に来ています。

一方、北海道では北大発ベンチャーは49社(昨年比+1)、旧帝大＋早慶において大学付きのベンチャーキャピタルが存在しないのは北大だけという状況で、北大内の教員・学生においてもスタートアップや起業に対する理解や意識は日本で一番遅れているといっても過言ではない状態です。北大の研究力に比較して、起業力は顕著に低いと言えます。

大学発の研究開発型スタートアップは一般的なベンチャー企業とは異なり、知財や技術ノウハウなどに裏打ちされた競合に対する強力な参入障壁と、昨今の公的な補助金やリアルテック特化型VCの隆盛により高い成功確率とリターンが期待できる状況ができつつあります。また仮に失敗したとしても、そのような経験を高く評価して中途採用する大企業やスタートアップも多くなってきています。

本レクチャーでは、昨今の世界・日本のスタートアップを取り巻く状況を紹介し、スタートアップを実際に立ち上げるにはどうすればいいのか？もし失敗したらどうなるのか？といった現在大学で研究を行なっているスタッフ・学生の皆さんが疑問に思われる点に関して説明したのちに皆さんとディスカッションできればと考えています。

講師略歴

北海道江別市出身。北大農学部(BS)→名大理学部(MS)→北大理学部(PhD)を経て長浜バイオ大学、北大生命科学院で助教。その後アメリカでバイオテックスタートアップの創業メンバーとして6年間従事。スタートアップ倒産後、JT経営企画部でスタートアップ投資・育成に従事。2019年に独立し日本の独立系ライフサイエンス専門ベンチャーキャピタル (Fast Track Initiative)、米系ベンチャーキャピタル、腸内細菌スタートアップなどを兼任。2015年より新渡戸スクールメンター。博士(理学)を北海道大学理学研究科から、MBA (Pharmaceutical Managemenet)をニュージャージー州立大学より取得。

問合先　北海道大学情報科学研究院　情報生物学研究室　遠藤 endo@ibio.jp